

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-152	15-102	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
Epidemiology of DSM-5 Drug Use Disorder Results From the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions-III. DSM-5に基づく薬物使用障害の疫学研究 NESARC-III研究結果		
執筆者		
Bridget F. Grant, Tulshi D. Saha, W. June Ruan, Risë B. Goldstein et al.		
掲載誌		
JAMA Psychiatry. 2016 Jan;73(1):39-47. doi: 10.1001/jamapsychiatry.2015.2132.		
キーワード		PMID
薬物使用障害		26580136
要 旨		
<p>目的：アメリカにおける一般代表集団での DSM5 薬物乱用の有病率、精神疾患の併存、身体障害、治療を調査した。</p> <p>方法：2012 から 2013 年に米国の一般代表集団における横断研究（NESARC-III研究）へ参加した 18 歳以上の成人 36,309 人に面接による調査が行われた。回答率は、家庭単位で 72%、個人単位で 84%、全体で 60.1%であった。主要アウトカムは、12 か月と生涯の薬物乱用とした。薬物乱用には、アンフェタミン、大麻、コカイン、ヘロインなどの向精神薬の使用を含み、併存疾患としてアルコール使用障害、ニコチン使用障害を評価した。</p> <p>結果：薬物乱用の 12 か月有病割合は 3.9%、生涯有病割合は 9.9%であった。薬物乱用者は、男性が多く、白人やアメリカ原住民で、若者、未婚者か離婚経験者で教育歴や収入が低いものや西部在住者に多い傾向があった。12 か月薬物乱用有病割合は、うつ、気分変調、双極性障害、パーソナリティ障害と有意な関連がみられた。生涯薬物乱用有病率は、不安症、パニック障害、社会恐怖症と有意な関連がみられた。12 か月薬物乱用有病割合は身体の障害と有意な関連がみられ、乱用の重症度により傾向的な関連がみられた。治療の受診率は、12 か月薬物乱用者のうち 13.5%、障害薬物乱用者のうち 24.6%であった。</p> <p>結論：DSM5 薬物乱用はアルコールやニコチン使用障害や他の精神疾患と併存しやすく、身体障害を伴うが、アメリカでは適切な治療が行われていない。今回の研究結果は、今後薬物乱用の理解や病気の因果関係、治療、政策決定を行う上での重要な情報となる。</p>		